

私の描く自由な世界  
黒陰の章

はいばーとりかぶとさん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

感想、評価頂けると嬉しいです。

些細なものでもアドバイスを下さい。文に違和感とかを感じてるのですが直し方がわからないので読者様方。その辺りもご協力願います。

# 目次

プロローグ	1
覚醒	8
起床	18
交流	26
契約 前編	34
契約 後編	41
防衛戦(?)	51
帰還	57



# 1 プロローグ

Inside. ??

くどこかの海域

?? 「敵影補足!! ル級又級共に一隻! ネ級イ級共に二隻! みんな逃げるよ!!」

それは安全な遠征なはずだった。

\* 『敵前逃亡は重罪だ。瑞鳳! 貴様に決定権など欠片もありはしない!』

あのレベルの敵艦隊と出逢わなければ

瑞鳳 「そんなこと言っただって私達は遠征用装備しか持つて来てない! 戦えません

!」

\* 『そんなことは知るか。だが重巡以上の敵でも沈められたなら帰還することを許そ

う』

瑞鳳 「だから武器が無いって

\* 『知ったことか!! 貴様らはいくらでも変えが利くのだ! その身を以って戦果を

挙げてこい!!」

それを最後に瑞鳳さんと提督との連絡は切れた。

瑞鳳「クソツ!! あのカズ早くトラ兄にチクって潰さない」と

その間にも敵艦隊は近づいて来ていた

??「私が行きます! だから皆さんは逃げてください!」

瑞鳳「春雨!? 貴女が行く必要はッ

春雨「私が一番燃料を持っています! それに万が一沈んでも新人の私なら鎮守府の

戦力低下を抑えられます。だから」

瑞鳳「分かった。けど貴女を死なせる気はないからさ。使う気は無かったけど、私も姉さんに借りたとおきでおきで援護する。敵艦隊の真ん中にドラム缶を置いてきて、私したら離脱後にとっておきでドラム缶を爆発させる」

春雨「わかりました」

私は意を決して敵の懷中に飛び込んだ

瑞鳳さんのおきのおかけで砲弾の雨に晒されながらも何とかドラム缶を敵陣に置いてくる事ができた。が離脱時にネ級の尻尾に引っかかって転んでしまった。

瑞鳳「春雨!」

春雨「やってください!!」

瑞鳳「でも「早く!!」ツ！ 分かった。願わくばまた生きて会えん事を」  
同時に急降下爆撃でドラム缶が爆発し、それにより私の意識は吹き飛んだ

l s i d e . 瑞鳳

春雨が爆風に包まれた時、私から涙が流れていた。他の娘達を生かすためとはいえ、  
私が春雨を殺したとも言える。

瑞鳳「みんな、逃げるよ！」

他四人「了解！」  
後ろにも敵さんのお出まし  
って『返り血のレ級』!? マジ  
か!？」

瑞鳳「嘘ッ！ ..... ホントに『返り血』じゃない！ ..... こうなったら私が両方を引き付けるからその間にみんな逃げて!!」

\* 「んなこと言ってたッ」

瑞鳳「旗艦命令ッ!! ..... 先に逃げてて。後で追いつくからさ!」

\* 「!! ..... 分かつた! ..... 殿はアタシが務める! ..... 沈むンじゃねえぞ! 『チカ』!!」

瑞鳳「分かつた ..... 無事に帰れたらおいしい卵焼きをご馳走するよ! ..... 江風!」

その言葉を交わし私は返り血を足止めするためにみんなと別れ、後ろへと向きなおる。

刹那、返り血が私の眼前に現れ、私は尻尾に喰われて沈んでいく

そう思っていた。



返り血はすれ違いざまになにか言ったあと、残っていた敵艦隊の方へと走り抜けて行った。

瑞鳳「よく分からないけど、みんなと合流しよう」

私は返り血が残敵と戦っていることを確認し、海中や空に注意しながらみんなと合流し、鎮守府まで撤退した。

l s i d e . 春雨 l

私は爆発により沈み、暗闇を漂っていた。

怒り、悲しみ、憎しみ。孤独や虚無といった負の感情が私の中に入ってくる

その時、ある人から聞いた『深海に堕ちる感覚』の話を思い出していた

「深海に墮ちる時つてさ、最初は『みんなに会えなくなるんだな』とか『誰々とどんな話  
ししたかったな』とかの後悔とか未練とかが主なんだけど、少しずつ『なんで自分だけ  
こんな目に』とか『みんなも連れてこなきゃ』なんてマイナスな考え方になつてく  
るの。」

まあ私の場合は、義兄さんがあつちから引き揚げてくれたお陰で帰つてこれたし、向  
こうの力も幾らかはコントロール出来るし飽くまでもこれは『私の場合は』だから他  
の娘だどうなるかはわからないけどね義兄さんいわく『入ってくるものによる』ら  
しいんだけど」

みんなと戦いたく無いなそんな事を考えていると、黒くヌメツとしたナニカが脚に  
張り付いてきた。

手で払おうと思つたが、金縛りにあつたかの様に動けない。

瞬間、話の続きを思い出した。

「あとね、義兄さんが『俺は何度かやったことがあるが、一番気持ち悪かったのが、精神  
を蝕んでから体を』つてくるやつで、その中でも途中からタコ足みたいナニカが出て

くる事があつたが、あればかりはキモすぎて受け容れられなかつた！ てか嫌すぎて断ち切つた』つて言つてて、私もソレには絶対に遭いたくないなつて思つてる」

春雨（これがあの人のお義兄さんが言つてたつていうやつだよ）

そう考えている間もタコ足の様なものはウネウネと絡みついて来ている。

タコ足の様なものが膝の辺りに来たとき、強烈な光が私を包んだ。

その光に吞まれ、私は意識を失つた。

# 覚醒

l s i d e . 春雨

目が覚めると私は海上に立っていた。

春雨「あれ？私沈みましたよね？」

私はタコ足の様なものに絡みつかれていたことを思い出し、脚に目をやった。

春雨「良かった。なんともない」

ホツと胸を撫で下ろした。

少し大きくなっていた気がするが多分気のせいだ。

空を見上げると、それは気持ちが良いほどの快晴で、吹く風も波打つ水面も心地よかつた。

波間に揺蕩いながら何分あるいは何時間。波や風の音に耳を澄ませていた私は、先程まで聞こえなかったエンジン音により意識を引き戻した。

春雨「彩雲! あのエンプレムは瑞鳳さんの所の子だ!」

私は彩雲に向かって大きく手を振り、自分の存在を知らせた。すると、彩雲は旋回し、来た方向に戻って行った。

春雨「なんで行っちゃうの?」

彩雲を迫っていると、入れ替わるように瑞雲が向かってきた。

春雨(??) 私を探しに来てるなら水偵のはず。瑞雲つてことは戦闘目的?

そんな事を考えていると、大きな砲撃音が響いた。

春雨(戦艦の人が来てるんだ)

直後に私の目の前に水柱が立ち、衝撃で後ろに吹き飛んだ。

春雨「もしかして狙われてる!?

だとしたら逃げなきゃ!」

私は、砲弾に当たらないように蛇行などを混ぜたりしながら精一杯逃げた。

必死に砲弾を避けていた。

少し前、左足の艦装に被弾した時のダメージで航行が遅くなってしまったため、今は逃げるのでは無く回避に専念していた。

春雨（幸いにも瑞鳳さんに近接戦闘の訓練を受けて受けさせられていたからギリギリ反応できてる。日向さん一人だけで撃つてきているからどうにかなってるけど、体力的にそろそろ辛くなって痛ッ）

そんな事を考えていると右足に痛みを感じ、目を向けると矢が刺さっていた。

日向「瑞鳳貴様！ 邪魔をするなど言っただろう!!」

瑞鳳「ここで時間取るよりも目的の『返り血』探しに時間を費やすべき。それ以外にどれだけ時間をかければ気が済むの？ そもそも私は『敵対しない深海棲艦とは戦わない』っていう大本営の方針に従うべきだと思うんだけど？ 伊勢さんもそう思わない？」

その時の瑞鳳さんの表情は怒っているようにも見えた。

伊勢「言われてみれば、そうかも？」

日向「大本営の方針など知るか！」

「まあいい。無抵抗のこいつを仕留めるだけでも『駆逐棲姫を仕留めた』という戦果がその大本営さまに認められて提督が大将になるための足がかりとなるのだからな！」

日向さんが刀を抜きながら近付いてくる

春雨（このまま一方的に殺されるのかな。でもいやうちの日向さんは性格的に敵と認識したら確実に沈めるタイプだから沈むのは確実だろうし。『一矢報いる』くらいは。つてあれ？）

ほとんど動けない私の前で

刀を振り上げ

そして振り下ろされる

春雨（結局一方的に殺されるんですね。もういいか。私はもう疲れました。せめて道連レテカエリマシヨウ）

瞬間、私の視界は赤黒く染まった

l s i d e . 瑞鳳

日向が駆逐棲姫にとどめを刺そうと刀を振り上げている

瑞鳳（なんかイヤな予感がするな）

そして、刀を振り下ろす

瑞鳳「みんな！ 次行く準備して」

そう指示を飛ばした瞬間

?? 「一方的ナ弱い者イジメハ見逃セネエンダヨナア！」

その声と共に生温い雫が頬に飛んできた。

日向「ぐツ、油断し過ぎたか！」

振り返った私の目に飛び込んできたのは、目玉？ が埋め込まれた禍々しい大剣を

担いで灰色のオーラを纏い、駆逐棲姫を庇うかのように立つ返り血と、右腕と刀を失っ

た日向の姿だった。

返り血「来ルナラ、相手シテヤル」



大剣で空を薙ぎ、オーラを強めながらハッキリと返り血は言う。そのとき

日向「ふざけるな！ 斬るなら本気でこい！ 返り血イ!!」

と日向が叫ぶ

返り血「ナンノコトダ？」

日向「貴様なら油断した艦娘一人程度、一撃で沈めることなど造作も無いはずだ!!」

返り血「ハッ！ アタシハ無駄ナ戦ハシナイ主義ダカラナ。退イテ欲シイワケダガ

殺り合ウナラ相手スルゼ？」

返り血が挑発するかのようになつた時、俯いていた駆逐棲姫から砲撃が放たれた。

ガキイン

返り血「ナンノツモリダ？ テメエ」

駆逐棲姫「キサマコソレキュウノブンザイデジャヤマヲスルノカ？」

どうやら駆逐棲姫の砲撃が返り血の大剣に当たつたようで、仲間割れのような事が起きているようだ。

瑞鳳「今のうちに撤退します。伊勢さんは日向を回収して離脱。私は少し遅れて撤

退する。」ヒソヒソ

伊勢「コクッ

?? 「でも瑞鳳さんはなぜ”遅れて”なんですか？」 ヒソツ

瑞鳳 「次回のための情報収集。あの剣に何かありそうだから。あと、鎮守府に帰つたら卵焼き作る約束してるから卵の用意お願いね。蒼龍」 ヒソツ

蒼龍 「分かりました。私も混ぜてくださいね」 ヒソツ ニコリ

瑞鳳 「もちろん。ぜひ来てよ」 ヒソツ ニコ

皆が撤退をはじめた時、睨み合っていた駆逐棲姫と返り血に動きがあった。

駆逐棲姫 「カンムスドモニミカタスルカ！ キサマツ」

返り血 「アアクソメンドクセエ！ 最初カラテメエノ方ニ用ハ無エ！ ダカラ取り敢

エズ寝テヤガレ!!」 ゴツツ

返り血が大剣の背で駆逐棲姫を叩いて気絶させ、こちらに振り向く。

返り血 「サテト 瑞鳳サンダツケ？ ヒトマズ何故一人デ残ツテルノカ教テ貰ツテモ

ヨロシイ？」

瑞鳳 「なら先に気付いていて何故見逃したのか教えてもらえる？」

返り血 「無駄ナ戦イヨシタクナイトソウ言ツタハズダガ？」

マア残ツテイタ理由ハ大方囿ノ名目デ昨日ノコヲ聞キニ来タンダロ？」

瑞鳳 「!! そうだよ。あの時、なんで私を見逃したのか、答えて！」

返り血 「ワカッタ 少シ待ツテクレ。アアー、あー、良しつと。」

瑞鳳（声が変わった!）

「返り血」簡単な話さ。逃したのもあいつらを沈めたのもウチの組織のルールに従っただけ。今回の事もね。他に聞きたいことは？」

瑞鳳「ならもう一つだけ。そのルールって言うのは？」

「返り血」アタシも全部覚えてる訳じゃねえけど、簡単に説明すると、「無意味に攻めるな」と「沈めるな」の2点だ」

瑞鳳「それだと前者の方は破ってると思うんだけど？」

「返り血」ハツ笑わせんな！逃げてるコイツに一方的に攻撃してただろうが！コイツの唯一の反撃はさっきアタシが剣で弾いた一発だけだ。」

瑞鳳「それを知ってるって事は最初から見えてたってこと？」

「返り血」質問が二つ目なんだが、取り敢えずノーカンとして、その答えはNOだ。知ってる理由は聞くな。」

さて、話を戻そう。まず、「攻めるな」に関しては先制攻撃もしくはそれに類することをするな。「沈めるな」はそのまま。大破まではやってよしって事」

瑞鳳「大破までやってよしって、そのへんの調整ができるのね」

「返り血」たまに当たり方が悪くて沈むのもいるが、そういうのは引き揚げて保護する」  
瑞鳳「保護って、その後保護された娘達はどうなってるの」

返り血「教えねえよ！ 三つ目だし、まあ拷問とかはしてねえってのが答えだな。で？ お仲間さんは撤退できたみたいだが？」

瑞鳳「なんで撤退できてるって言い切れるの？」

返り血「？ なんとと言われても、アンタのお仲間さんを視てるしな。ああ攻撃はしてないよ。ホントに」

瑞鳳（返り血の言い方的に、鎮守府の場所は知られてる）「なら

瞬間 pipipipipi

とアラーム音が鳴り響き

返り血「うおあ!! もう昼か。帰らないと姉ちゃんに怒られる!」

同時に尻尾艀装が海中から駆逐棲姫を喰らい、海中へと戻って行った。

返り血「アタシはもう帰る。ジャアナ」

瑞鳳「待てッ!」

返り血「アバヨ瑞鳳! ツイデニ教エテヤル! アタシハ『ー』ダ『返り血』ジャ

ネエ!!」

瑞鳳「なんで!?!」

『タダノキマグレダ』と彼女は言い残し、姿を消した。

その後、鎮守府に帰って遠征時の仲間達＋蒼龍で楽しく女子会していた。

彼女の事でモヤモヤしながら。ではあるが

.....

## 起床

l s i d e . 春雨

見捨てられた孤島の鎮守府

春雨「んんうう」フアア

私は目を覚まし、辺りを見回す。

見知らぬ天井と風になびく白いカーテンその隙間を縫って入ってくるオレンジの光と窓際のミニテール。その上で光を反射している手鏡、そして開いた窓から入ってくる海の匂いだった。

春雨「ひとまずは状況を整理するために何があつたか思い出しましょう」

私は寝ていたベッドを直し、腰掛けた。

春雨（まず、今日。目覚めた時には海上にいて、風と波の音が心地よかつたからそのまま瞑想。呆けてたけど、プロペラ音が聞こえて手を振つたんだっけ。

で、入れ替わりで瑞雲が来て、目の前に着弾。弾着観測射撃だったんだろうけど、どうにか逃げてたんだよね。逃げてるときに左足に被弾したけど、頑張つて逃げ

回つてた。けれども直後に右足に瑞鳳さんの矢が刺さつて、日向さんに斬られた？

.....  
 .. だとしたら生きてるわけがない！

.....  
 .. それに良く考えてみたらおかしい点がいくつもある.....

.....  
 .. まず普段だったら一人で海になんか行かない。行くわけが無い！ それに波の音に

耳を傾けていたりしていたら敵に見つかることくらい解るはず。

.....  
 .. それに日向さんが砲撃してきたのは？ 瑞鳳さんが矢を射てきたのはなんで??

.....  
 .. 考えられる可能性..... そうだ！ 遠征の帰りで私はドラム缶を爆発させて一度沈んだ

から、生きてるとなにかマズイのか？ だとしても瑞鳳さんはそんな事するはずない

し..... そういえば斬られる前。日向さんが私に向かって『駆逐棲姫』と言っていた気がす

る。

.....  
 .. いや、いくら駆逐棲姫が『春雨』に似ているとはいえ、あの距離なら見間違うはずが

ない！ それに瑞鳳さんもいたわけだし見間違ふことはありえない

.....  
 .. ということは私が本当に駆逐棲姫になっている？ だとしたら意識があることが

おかしいはずだし、駆逐棲姫には足が無かつたはず..... そうだ！ この部屋には手鏡があ

る。それで自分を写せば.....

.....  
 .. 私は鏡を手に取り、恐る恐る自分の顔を鏡に写す.....





「ん、見たことない天井、いや、一度見たことのある天井。夢で見た部屋」

私は再び目を覚まし、辺りを見回す。

天井と風になびくカーテン、その隙間を縫って入ってくる太陽の光と窓際のミニテール。光を反射している手鏡、そして開いた窓から入ってくる海の匂いだった。

夢と違う所は、太陽の光が白く薄いことから夕暮れではなく朝であるということと、カーテンが薄赤いこと。

そして、外から小鳥のさえずりも聞こえることだった。

春雨「同じ様で違う部屋。でもそんな事より、私が私であるかが重要ですね」

私はテールの上の手鏡を取り自分を写した。

春雨「良かった。私は私のままですね！ 服装が暗いですけど」

安堵し、胸を撫で下ろした。

それと同時にドアが開き、誰かが部屋に入ってきた。

?? 「起きたか。気分はどうだ？」

春雨 「あなたは何者ですか？」

?? 「アタシは、まあレ級だな。普通に。で？ 姫さんはご機嫌いかが？」

春雨 「姫さん？ 何を言ってるかわかりませんが私を捕えてるってことは捕虜にでもするつもりですか？」

そう言うレ級は少し考えるような動きをして

レ級 「もとはそのつもりだったが、堕ちてから戻ってんならウチの組織に入ってもらいたいんだが。」

春雨 「拒否します！ 私は艦娘ですので敵に加担する気は微塵もありません！」

瞬間的にそう返すと

レ級 「深海棲艦の組織ってだけで人類の敵と考えるのはやめとけ！ ウチは

レ級が何かを言おうとした時

?? 『『クレハ』く早く来ないと朝ごはん冷めちゃうよ』

というゆるい声が聞こえた。

レ級 「そーういやそーうか！ ひとまずメシだからさっさと行くぞ!!」

春雨 「敵からの施しは「餓死されたらたまったもんじゃねえんだよ!!」きやあ！」

言うが早いかレ級は私を抱え上げた。

レ級に抱え上げられた私は数秒のフリーズの内に抵抗する暇もなく食卓に連れてこられた。

レ級「姉ちゃんおまたせ！」

レ級が厨房の方に声をかけると、厨房からエプロンを着けた女性が出てきた。

??「ちようどできたところだから席に座って食べて。私は食器と器具の片付けして  
るから食べ終わったら持ってきてね〜」

レ級「あーい」

レ級は私を近くの席に置き、降ろして自分の席に着いた。

??「あなたも食べてみて。口に合うかはわからないけれど」

彼女は優しい声色で私にそう言った。

春雨「敵から出された料理なんて私は食べません！」

??「敵かあ。面と向かって言われたのは久しぶりだな。でもね、わかってくれないとは思うけど、私達は深海棲艦だけど人と仲良くしたいとか平和に暮らしたいとかっていう娘が集まってできた中立組織なの」

春雨「中立組織？ なんの冗談ですか」

??「ホントだよ？ あと、組織では個人で名前を持つてる娘が多いんだよ。

所属

してないのにも稀にいるけど、あなたは他の『駆逐棲姫』とは違うから個人名を持った方が良いと思うよって言う提案！」

春雨「私は『春雨』です！ 駆逐棲姫じゃありません！ したがって個人名も要りません！」

即答すると彼女は数秒の沈黙の後

??「そうじゃなくて、組織には他の春雨もいるかもしれないから個人名とかは識別のためにもあつた方が良いでしょう？ ってこと！」

あと、冷めちやうから早く食べてね。捨てたりするのは勿体ないからさ」と厨房へ戻って行つた。

その後少しの間考えていたが、結局お腹が「ぐー」と鳴つたのをレ級に聞かれてしまい、やけになつて食べ始めたのだが、好みの味付けだったため、あつという間に完食してしまつた。

春雨「ごちそうさまでした。認めたくはないですが美味しかったです」  
??「お粗末様です♪喜んでもらえて良かった」

彼女はホツとしたといった表情になり、胸をなでおろした。

レ級「そんじやまあ朝飯も食い終わつたところで、自己紹介しとこうぜ！ 姉ちゃん」

??

「そうだね。

自己紹介は大事だし！」

.....  
じゃあまずは私からね。

## 交流

l s i d e . 春雨ー

?? 「じゃあまずは私からね。名前は『深代 凍華《ミシロ トウカ》』 空母ヲ級の

たしか elite だったかな？

形式上は黒陰部隊のトップやってるよ。

『温度を操る程度の能力』を持ってて、通り名は知っての通り『氷血』さんだよ♪よろしくね！ はい私の終わり！」

レ級 「んじゃ次はアタシの番だな！

アタシは『深代 紅刃《ミシロ クレハ》』『超弩級重雷装航空巡洋戦艦』とか呼ばれる事もある戦艦レ級の多分 elite クラス。一応姉ちゃんと同じ様に黒陰部隊のトップやってる。

能力は『血を操る程度の能力』と『魔剣を扱う程度の能力』の二つだ！ 通り名は『返り血のレ級』ってやつだな！

アンタが敵対しない限りはアンタの味方のつもりだ」

春雨「ご丁寧にどうも。大湊第八鎮守府輸送艦隊『ハウセンカ班』所属。白露型駆逐艦五番艦 春雨です」

紅刃「ほー。こんだけ早口で喋れるんなら喉も大丈夫そうだな！」

春雨「？ 喉ですか？」

凍華「一昨日の夕方頃にあなたを寝かせていた部屋を見に行ったの。そのときは窓が開けっ放しだし鏡も割れてるし血が飛び散ってるしで掃除が大変だったんだよねー」

あの鏡お気に入りだったのになー」ハハハ ドヨーン

紅刃「あつ、姉ちゃんが負考<sup>ふこう</sup>モード入った

えーと、つまりはそんな時に飛び散った血がアンタのもので、その時のアンタは首から大量出血してて死ぬ寸前だったけど、そこからなんとか傷を治したりなんだかねで大変だったわけだが、まあ後遺症とか違和感無しでちゃんと喋れてるならOKだ！」

春雨「つまり、私は一度殺されたってことですか？」

紅刃「んにや、自傷っぽかったが、まいつか！」

姉ちやくん戻ってこい」ペチペチ

凍華「ブツブツ。ふみゆ？ 紅刃？」

紅刃「おかえり」

凍華「？ あ、そっか！ 春雨ちゃんの名前考えるんだったね！ うくんどうしようかな？」

紅刃「アタシも一応考えてみるか！」

春雨（なぜか私のことのはずなのに、私が空気です）

「よし！ これに決めた!!」

はい。春雨です。凍華さんたちが大声を上げている理由の説明をします。

先程、少し考えてふざけて「麻婆でいいですよ」って言ったら即否定されてしまい、セクスが壊滅的だと思われたのか現在、凍華さんと紅刃の考えた名前のしつくり来たほうを選ばされることになっています。

紅刃はさん付けとかがむず痒いそうなので、呼び捨てに固定されました。



因みに凍華さんは姉さん呼びにして欲しいそうです。

凍華「それじゃあどっちから発表する？」

紅刃「どっちからでもいいぞ！」

瞳をキラキラさせる凍華さんと自信満々といった風な紅刃。

二人は目を合わせて互いを静かに見つめあっていた。

春雨（何やってるんでしょう？）

二人で「どうする？」「どっちが先に言おうか」と簡単な掛け合いをして

「まあ春雨（ちゃん）に決めてもらえばいいよな（ね）！」

春雨「へ？」

二人が首をこちらに回し、そう言った。その時、私はちよつと怖くてフリーズしていた事は気づかれてはいけません。

紅刃「どっちの案を先に聞きたいかって質問だ」

春雨「どっちからでもいいですけど、選ばなきやだめですか？」

と聞くと紅刃が「選んでくれると助かるな」といい、凍華さんもそれに頷いた

春雨「それじゃあ、凍華さんから」

そう答えたときの二人の顔は真逆になっていて、凍華さんはすごく嬉しそうな表情で、紅刃は絶望したかのような表情を浮かべている。すぐに自分の番になるのに、でも

こんな表情されると罪悪感が湧いてきます。

凍華「それじゃあ私の案は『ミウ』海に雨で『海雨』っていうのだよ」

紅刃「アタシの案は『ハルカ』春の香りで『春香』なんだが、なんかどつちも微妙か？」

春雨「確かに。なんとなくこれじゃない感があります」

紅刃「じゃあどうするよ。姉ちゃん」

凍華「え？ ああうん。いいんじゃないかな」

紅刃「どつちもしつくりこないから別の考えようって話なんだが」

凍華「そっか、ごめん。ぼーっとしてた

でも、ひとつ良さそうなの思いついたから発表していい？」

紅刃「いいんじゃないか？」

言いながら確認を取るかのようにこちらに瞳を向けてくる凍華さん。それに応じて頷く

凍華「それでね。『ハルミ』ってどうかな？春の海で『春海』」

そうして出てきた名前は不思議と私の心にすっぽりと収まった。

紅刃「確かに、なんとなくしつくりくるが、決めるのは春雨だからな。どうだ？」

春雨「すごくしつくりきました。なのでその名前頂きます」

凍華「じゃあ決定だね。これからよろしくね！ 春海ちゃん」

春海「はい！ よろしくお願いします」

ちなみに、苗字は二人と同じ深代になるらしい。

そして、このときにはもう二人に対しての警戒心などはほとんどなくなっていると気づく。たぶん会話のゆるさとかで警戒心が薄まったのだと思う

とそんなことを思っていると紅刃が喋り出した。

紅刃「名前も決まったところで時間も丁度いいし、今日の哨戒どうするよ？」

凍華「私がやるよ。春海ちゃんが寝てた間ずっと任せきりだったし」

紅刃「んじゃ頼むよ」

凍華「そっちは春海ちゃんの案内とかその辺やつといてね」

紅刃「あいよ。任せられた」

そうして凍華さんは部屋を出た。哨戒に向かったのだろう。

それから私は紅刃の案内のもと鎮守府の敷地内を歩き回り、大体の設備や地形などを確認している。

鎮守府エリアの中庭だったであろう場所には畑があり、鎮守府裏の森には果樹園があったり、その奥に『木漏れ日の間』と呼ばれる場所があったりと島内だけでも十分な生活が送れると思えるほどの設備が揃っていた。

そして現在。再び鎮守府へと戻り、ホコリだらけの部屋を紅刃と共に掃除して工廠裏の倉庫に入っていた家具らしきものを部屋に運び入れていた。

春海「ここでいいですか？」

紅刃「いいぞ、それじゃあ大体は出来たし、今からここは春海の部屋とする！」

春海「え!? いいんですか？」

この部屋は本来ならば四人くらいで使う間取りのはずだが「基本的に人来ないからOK!」ということでも半ば押し付けられた。

部屋にはベッドやテーブルだけでなく冷蔵庫やレンジなどもあつて豪華な一人暮らし用の部屋レベルになっていた。

そして私は現在、紅刃が冷蔵庫に入れていったジュースを飲んでまったりとだらけていた。

紅刃「春海、部屋は気に入ったか、つてとろけてんぞ表情! そんなにとろけてるとアタシが食べちゃうぞぞ?」

春海「自室で何をしようと勝手です！」

紅刃「ごもつともだ! ・・・んで本題だが、お前に見せたいものがあるからちよつと付いてこい」

そう言つてどこかに歩いていく紅刃の後を付いて行く。

そうして鎮守府内を歩き、とある場所の前で足を止める。

紅刃「ここに見せたいものがある」

春海「さつきは何も無かったですよ？」

紅刃「いいから来い」

そう言つて紅刃はその場所、工廠へと入つて行き、私もその後続いた。

先程来た時と変わらない鈍色の広々とした空間。その中に先程はなかったはずの

物がポツンと存在していた

## 契約 前編

春海「これは？」

紅刃「見て分かると思ってたんだが、まあ艀装だ」

春海「誰のですか？」

紅刃「一応は春海用のだ」

春海「私の適正艀装じゃ無いですよ？　まず大きさに」

紅刃「お前の艀装コアを素材にしてるから使えるとは思うし、念を入れてサポートにちよつとしたシステムも使つてあるから大丈夫だ」

春海「本当に大丈夫ですか？」

紅刃「大丈夫だとは思うが、ひとまず着けてみればわかる」

そう言つて紅刃は入り口で止まっていた足を動かし始める。

多少のいや、だいぶ大きな不安を抱きながらも私は紅刃の後を一步ずつ付いていく

紅刃「ひとまず着けてみてくれ。そうすればその後のチューニングとかができる。最

悪作り直すことになるが、そんな時にやリクエストも取り入れる予定だ」

という紅刃の言葉を聞き、『今着けなければまた後でやることになるだけだろう』とそんなことを思った。

春海「本当に大丈夫ですまね？」

紅刃「ああ！ 大丈夫だ。もしも駄目だったら艀装を強制シャツトダウンするから安心しろ！」

春海「着けてから言わないでくれますか？」

紅刃「悪い悪い。そいつ自体は起イグニッション動イグニッションつて言えば接続できるからさっさとやつちやいな」

春海「艀装名は？」

紅刃「適合してから教える」

春海「わかりました。では、起イグニッション動イグニッション」

そういうと同時に私は、艀装に吸い込まれていくような感覚とともに意識を手放した。

そして、次に意識を取り戻すとそこは光のない空間。言い表すならば、混沌の渦とも言うべきだろうか？ そんな空間に私は立っていた。

春海「ここは一体」

という私の問いに答えるかのごとく、どこからか声が聞こえる。

「ようこそ同志よ！ 我々の中へ！ 我々は貴殿を歓迎するぞ」

春海「誰ですか!？」それに『我々の中』ってどういう」

「そんなことより顔を見せてくれ。目を見て話そうではないか！」

不安定に響いていた声が不意に後ろで収束して聞こえ、振り向くとそこに藍色のタキシードのような衣服を纏ったル級が立っていた。

ル級「改めて、ようこそ My master」

彼女はそう言って礼儀正しくお辞儀をして「質問はございますか？」と問いを投げかけてくる。

春海「聞きたいことはいくつかありますが、まず最初に『ここはどこか』そして次



に『あなたは誰か』まずはこの二つを答えてください」

ル級「はい。ここは我々『ザザザツ』の中になります」

とそこまで言うのと、ル級の纏う衣服は赤黒く変色し、オーラ？ のようなものも変化した。

ル級「そして、『ザザザツ』のコアに棲まう者。核棲者であり、貴公のサポーターとなった者だ」

春海「名前を教えてください。それと口調や服が変わった訳も」

ル級「焦るな主よ。名前なら核棲者なのだが、強いて名乗るなら『ルイン』とでも名乗ろう。姿がル級だからな」

言い終わると同時にルインの纏う衣服は藍色に、オーラもまた先程のものに変化する。

ルイン「三つ目の問いへの回答ですが、我々『核棲者』は『ザザザツ』の名前の通り、様々な魂及び艦種が混ざっているので極稀に他の魂が表側に出ます。現在 My master が会話した二つの人格、**・** **・** **・** というか魂が主に出ていますが、後々、他の子達とも仲良くして頂けると幸いです。**・** **・** **・**

さて、一つお願いなのですが彼女の質問に答えていただけませんか？」

春海「彼女？ もう片方の魂さんのことですか？」

ルイン「はいその通りです。無理にとはいませんが。受けて頂ければ、彼女が持つ経験という力を十分に貸してくれることでしょう」

春海「？ だとしたらあなたの役割は何なんですか？」

ルイン「それについての答えは彼女の質問を受けるかの選択をした後にお答えします。彼女がきちんと我慢して表に出て来なければ、ですが」

春海「わかりました。私は赤ルインさんの質問を受けます！」

ルイン「そうですか。私からも感謝申し上げます。では、先程の質問についての回答を。」

その時、ルインの衣服がまた赤黒く変わっていき、周囲の空気、いや、ルインからの圧が変化する。

ルイン「ふふッ我が赤なら奴は青か？ わが主よ」

春海「そうですね。ですが青ルインさんの話を先に聞きたいので代わってもらえませんか？」

ルイン「まあそう急な主よ。私の問いに答えてからでも聞けることだ。それなら別に後回しでも良いであろう？」

春海「確かにそうですね」

ルイン「最悪、我からでも伝えられることである故、教えることもできるが？」

春海「いや、青ルインさんから聞きたいので大丈夫です」

ルイン「そうか。奴の出番を減らせると思ったのだが残念だ。ではそろそろ質問を  
始めさせてもらおう。」

「と思ったがその前に主よ。貴方の名を聞かせてくれないか？」

春海「私の名前ですか？ 知ってるものかと思つてました。」

白露型の五番艦の春雨。名前は深代 春海といひます春海で呼んでください」

ルイン「ふむ。それならばそう呼ばせてもらおう。では本題だが、我々という力を得  
たとして、どのような目的に使い、何を望む？ 平和か？ あるいは復讐か？」

春海「なぜそんなことを聞くんです？」

ルイン「なに。ただ道具として使用者の目標を聞いておきたいだけだ。その方が色々  
と動きやすいし、助言もしやすい」

春海「わかりました。でも、目標と言われても今は特に無いです。強いて言うなら  
復讐とは違う形で元いた鎮守府の仲間を“解放”したいとだけ」

ルイン「“解放”ねえ。先にいつておくが全員が望んでいるとは限らんぞ？」

それでもやるか？ ハルミ嬢」

春海「全員が望んでいるわけでないのは分かっています。でも、私と同じ様な沈み方  
をする人を少しでも救えるならそれでいいです。私みたいな偶然は多分。もうないで

しようから」

言い終わると同時に激しい頭痛が私を襲った。

春海「痛ツ。すみません。ちよつと頭痛が。」

ルイン「主よ落ち着いて深呼吸をするのだ！ そうすれば収まるはずだ!!」

ルインのその言葉すら今の春海には痛みを増長させるだけのものであり、そのまま彼女の意識は痛みによって押し潰された。

押し潰される寸前、彼女はナニカの声を聞き、同時に意識は押し潰された

.....

# 契約 後編

再び春海が目を覚ますと、そこは元いた工廠——ではなく、ルインたち核棲者かくせいしやが棲まう『??』の中の混沌空間だった。

春海「まだこの場所ですか」

起き上がろうと力を入れるのだが、押さえつけられているのか、起き上がる事はできなかつた。

「なんで動けないんでしよう？」そう思いながら、周囲を見渡すために少し上を向くと、動けない理由はすぐに分かつた。

春海「ルインさんが膝枕してくれていたんですね。でも、このままじゃ動けませんしルインさん！ 起きてください！」

春海が呼びかけると、ルインは目を開き一度深呼吸をして

ルイン「おはようございます。頭痛はもう大丈夫ですか？ My master」

春海「頭痛はもう大丈夫です。心配してくれてありがとうございます」

ルイン「それなら良かったです」

話によると、私が倒れた後すぐに青ルインさんに代わり、膝枕しながら起きるのを待つつもりがそのまま寝てしまっていたらしい。

春海「そういうえば赤ルインさんはなんて？」

ルイン「力は貸してくれるみたいですが、今は出てきたくないそうです。

あと、そろそろこの混沌の様な背景嫌になつてきたので変えていいですか？」

春海「できるんですか!？」

ルイン「一応は精神世界の類ですので。

どのように致しますか？」

春海「なんでもいいです。こういう気持ち悪い系じゃなければなんでも.....」

ルイン「承りました」

青ルインさんはそう言つて私に軽い礼をすると、同時に混沌だった世界が、明るい花畑の風景に変わった。

ルイン「では、続きのお話はこちらで」

そうしてルインに付いて行くつた先には某フレクル戦艦が居れば確実に優雅なティータイムが始まっていると断言できるレベルのテラス？があつた。

春海「何なんですかここ」

ルイン「精神世界ですから何でもできるんですよ。では、お話はティータイムしながらでいいですよね？」

春海「そうですね。立ち話は疲れますから、それをお願いします」

ルイン「はい♪ ではこちらへお掛けください。My master」

ルインに言われるまま春海は椅子に腰掛けた。

ルインもティータイムの用意を終わらせてからその向かい側の席に座る。

ルイン「お待たせしました。さて、それでは私の役割についての話からでよろしいでしょうか？」

春海「お願いします」

ルイン「はい。極端に言ってしまうえば、私の役割はこの艤装の管理及び基本的なアドバイスです。

ちなみに彼女の場合は戦艦装備の担当アドバイザーと近接戦闘の教官という形になっています。

他の核棲者も一人につき一つの艦種を担当しています」

春海「つまり青ルインさんは艦種じゃなく全体を担当しているということですか？」

ルイン「いいえ。正確には輸送艦担当ですが基本的に輸送艦は使われませんので潜水艦と空母以外の全艦種の担当者代行が可能になっているだけです。

簡単に言ってしまうほどの艦種としても動ける輸送艦。もつと簡単にすると、格闘ゲームの持ちキャラ以外でも上手く使えるけれども持ちキャラだとプロレベルな人です。

説明が通じているかはともかく、駆逐、潜水艦以外の各艦種の担当者が力を貸してくれるようになるまで私がその艦種を担当します」

春海「わかりました。」

他の艦種担当の人もルインさんだったりします？」

ルイン「いいえ。他の担当者は、各々の姿とコードを持っています。彼女の『ルイン』のコードは先程思いついたようですが。」

春海「青ルインさんには別の名前もあるんですか？」

ルイン「いえ、私は名前も姿も無いので彼女と同じ姿で『ルイン』と名乗ることに決めました？」

青ルインを簡略化して『アオ』とでもお呼びください」

春海「はい。それでは改めて、よろしく願います。アオさん！」

アオ「こちらからも、改めて宜しく願います。Master」

彼女の『ルイン』と名乗ることに決



それから二人は他愛もない話を交えながらティータイムを楽しんでいた。

ポットから紅茶がなくなつた頃、春海がふと思ひ出したことを言葉に乗せる。

春海「そういうえば、ここからはどうやって出ればいいんですか？」

アオ「はい？　　ここから出るには『出たい』とか『戻りたい』と念じれば出られ  
ますよ？」

春海「本当ですか!？」

アオ「はい。本当です」

春海「もつと早く教えて下さいよー」

アオ「すいません。知っているものとばかり　　それともう一つ。再びこちらに来ると  
きも念じれば来れます」

春海「わかりました。それでは私はこれで一旦帰ります」

アオ「畏まりました。また会える日を楽しみにお待ちしております。Master」

その言葉を背に私は『帰りたい』と念じた。視界が暗くなつていく途中、アオさんが  
何かを言っていたようだが、聞き取ることはできなかつた。

意識を取り戻すと同時に目を開き、辺りを見回す。

「どうやら、ちゃんと工廠に戻ってこれたようだ。」

「終わったっぽいな。おかえり。あとお疲れさん！」

後ろから声が掛けられ、直後に『ガァン』と鉄板が床に叩きつけたような音が響く

春海「ただいま戻りました。でいいんでしょうか？」

紅刃「細かいことは気にするな！ 禿げるらしいぞ？」

春海「女性は禿げません。それに私達の場合禿げたとしても入渠すれば治ります。多

分

紅刃「そうなのか!? まあそんなことはどうでも良いか！」

春海「確かに今の私達にはどうでも良い事ですね。」

「そういえば接続してからどれくらい経ちました？」

紅刃「んゝ 5分以上、10分未満かね？ 本来なら1分も掛からない予定だったん

だがね〜」

春海「すいません。中でティータイム。というか女子会しました」

紅刃「ああいや、別にお前は悪くない。ただ自分の未熟さを再認識しただけだ。こいつのシステムとはあるシステムを模したものを使ってる。

だが、そいつらの場合は中で何やってても10秒程で出てくるから、もつと完璧に真似ないとなつてだけだ。

もう一度言うが、春海は微塵も悪くないから気にするな」

春海「分かりました。ていうかさつきから気になつてたんですが、なんですかその剣!? 装飾だと思つてた目玉もギョロって動きましたし、なんか禍々しいですし。」

紅刃「ん? ああこれか! こいつは『ソウルエッジ』っていう異世界の魔剣のレプリカなんだとき。兄貴くれた時に言つてた」

紅刃は軽々と担ぎながら説明をするが、春海は疑問を感じて質問を投げ掛ける

春海「レプリカならなんでその目が動くんですか?」

紅刃「ん〜と、確かレプリカだけどレプリカじゃないから。だつたっけ? まあアタシもよく分からん! 使いやすいからサブで使つてるだけだ!」

その説明を聞いて困惑する春海を気にせず再び紅刃は床へと剣を立てる

紅刃「話を戻すがその艷装の名前。まだ言つてなかつたよな?」

春海「……コクン」

紅刃が声を掛けると、春海は虚ろな感じではあるもののコクリと頷き、それを「まだ聞いていない」という意味と取った紅刃は一拍おいて話を再開する

紅刃「そいつの艦装名は『アマルガム』。中の奴らに聞いたのか？」

紅刃が質問を投げると、春海は眠気が覚めたかのように紅刃に目を合わせ

春海「すいません。ぼーっとしてました。なんの話でしたっけ？」

紅刃「お前の艦装の名前の話だ」

春海「ああ、そうでした。それで、なんて名前なんですか？」

紅刃「さっきお前が言った通り『アマルガム』だ。中のやつから聞いたのか？」

春海「初めて聞きましたよ？ ルインさん達に聞こうにもノイズみたいなのが走って

聞こえませんでしたし」

紅刃「そうか。じゃあさっきのは一体」

瞬間、工廠内に「電話だよ。電話だよお姉ちゃんから電話が来たよ」と凍華さんの声が響き、紅刃は懐からケータイを取り出して電話に出た。

その間、私は目を閉じていた。

紅刃「ああ、了解！ 春海も連れて向かう。もう少し耐えてくれ！」

と、電話を切って私の方へ向き直った

紅刃「春海。こんな時間からで悪いが出撃だ。何も聞かずに着いてこい」  
 いつものユルめな時と違って真剣な表情の紅刃は海へと向かって行き、私もその後  
 続く

海に足をつけ、潮風に包まれる。

水平線に反射する夕日で目が少し痛い、そのくらいはなんとかなるだろう。

紅刃「アマルガムの初使用で初出撃だからヤバいと思ったたらアタシがカバーするし、  
 最悪逃げても良いが、この場所だけはバレないようにな」

春海「わかりました。最悪、逃げるだけ逃げて撒きます。.....できる限りは戦いますけ

ど  
 「」

紅刃「ん。大丈夫そうだな！

じゃあアタシは先に出てるから、慣らしながらでゆっくり来てくれ」

そう言い残して紅刃は水面を蹴り、大海原へと走って行った。

春海「よしっ！ 私もできる限り早く追いつきましょう！

『アマルガム』起動!!  
イグニッション

春海は張り切って叫ぶ。同時に脳内に直接アオの声が入ってくる

アオ「張り切っていると場所申し訳ございません Master。二回目以降の起動

は、使いたい艦種と艦装名。例えとしては『輸送戦艦アマルガム』とコールしていただければ自動で起動及び展開致します」

春海「そうなんですか!?

なら改めて『輸送戦艦アマルガム』出撃します!!」

そうして、彼女もまた大海原へと駆け出して行くのだった

## 防衛戦（？）

Isidre. 紅刃

アタシは姉ちゃんからの緊急SOSを受けて鎮守府から飛び出て来たが、どこに居るか聞き忘れたせいで見つかるのに時間は掛かったものの、すぐに見つけて一直線に滑走<sup>はし</sup>っている。

（冷静に考えると姉ちゃんは9割方大丈夫だよな。むしろおいて来た春海の方が危ないような。アマルガムの奴らが居るから大丈夫だとは思うが、ヤバいな。心配し出したらきりが無い）

これでは駄目だ。と思い、自分の頬を叩いて意識を切り替えた。

瞬間。前方に大きな飛沫が上がり、回避できずに大量の水を被ってびしょ濡れになってしまった。

紅刃「寒い。このでかさの飛沫が上がることは砲撃か？ だとしたら何処に見つけたッ!!」

視認できるギリギリの位置に戦艦をはじめとした計6隻の艦隊が確認できたため、全

速力で接近して行き、一瞬の急制動を挟んで反撃として海水を剣で思い切り掛けてから陣形の間を通り抜ける。

紅刃「今は急いでんだ！ これだけで勘弁してやらア！」

そうして全速力のまま目的地へと走り去る。が、不思議なことに背後からの砲撃などは一切無かったのが不気味ではあった。

(それにしてもあの旗艦の五十鈴、どつかで見た事あるような気がするんだよなあ)

一瞬そんなことを思ったが、ひとまず姉ちゃんの救出に集中しようと思えば深呼吸により、再び意識を切り替えて姉ちゃんの反応のほうへ向かって行った。

l s i d e . 凍華 l

私はとある鎮守府で一人の艦娘を護りながら、その子の仲間から  
..... 実弾撃たれてたか



ら多分『元』が付くのかもかもしれないけど、の攻撃を撃ち落としたり、防いだりしていた。逃げればいいと思うだろうが、見た感じ彼女の機装が中破しているので逃げるのは少し難しい。

「とはいえMPが十分に残ってるから一人程度余裕で護れるし、もう時期に紅刃も来るだろうからそれまで受け切る。よりは多少反撃したほうがいいかな？ ま、いつか」

瑞鳳「氷血、貴方なんのつもり？ 私を助けて何がしたいの？」

凍華「!? ビックリしたくそつちから話しかけてくるとは思わなかったよ。で、助ける理由？ それはもうじきに分かるからもう少し護られてくれると嬉しいな」  
多少驚いたものの、いつものように目を合わせて優しい声で答えを返す。

瞬間、後方から耳を裂くような轟音が響き、そちらへ振り返るとともに、顕現させた杖を振るい砲弾を受け流した。

（危なかった、戦艦の砲撃とか食らったら余裕がなくなるから攻撃は最大の防御を實行する羽目になるかと思っただよ）

砲撃を受け流し安堵するが、それも束の間。今度は刀を抜いてこちらに向かってくる。

（これはちよつとマズいかな。近接戦はそこまで得意じゃないからこの日向には勝てないし、しょうがない。スペカ使おう）

凍華 「スペルカード!!」 【熱符】 『スチームミスト』

日向 「ぐうッ、熱い。だがこの程度で私は止まらんよッ!!」

(止まってくれると助かったんだけど。突破されそうだしもう一枚使っちゃうかな)

凍華 「それならッ!」 【冷符】 『アイシクルウォール』 つ!!」

(これで止められなくとも霜焼けとかで少しでも時間稼ぎにはなると思うけど、構えは解かないようにしよう)

日向 「この程度で。止まるものかっ」

(一応はこれで大丈夫だよな? ちゃんと凍ったし。紅刃もこれで動けなくできるし大丈夫だよな! .. ホントに大丈夫だよな?)

瑞鳳 「日向ッ!」

凍華 「大丈夫だよ。常温で一時間、入渠すれば十数分で溶けると思うから。」

完全に凍りついたことで動けなくなっている日向に背を向けて瑞鳳の方にゆっくりと向かっていく。ちなみに最初から瑞鳳を撃っていた艦娘たち以外にも出てきて、こちらに撃ってきてはいるが、自動迎撃術式によって一発たりとも私達には当たりもしない。(うーん。紅刃まだかな? 場所伝え忘れちゃったけどもう来ててもおかしくない筈なのに。)

そんなことを考えた刹那。背後から何かが割れる音が響き、咄嗟に振り返ったがその

時には彼女の間にまで近づかれていた。

日向「氷血ッ！ その首貫った!!」

氷血「まだ沈みたくはないね!!」

まだ間合いギリギリだったようで少し後ろに反れることで避けることはできたが剣圧におされ転倒してしまった。

日向「先程は外したが、次はもう無い。確実に仕留める!!」

そうして風切り音と共に刃が振るわれる。瞬間、ぱしゃんという軽い音と共に、日向が吹き飛んでいった。

凍華「はあ、予想よりだいぶ結構遅かったね。助かったよ。紅刃」

紅刃「ああ。それより姉ちゃん大丈夫か？ 傷は？」

凍華「腕が少し切れたくらいだよ。さつき紅刃が吹き飛ばしてくれてなかったら腕どころか沈むかもってくらい危なかったよ」

紅刃「それくらいなら治せるよな。じゃ、もうじき春海が来るから先に帰る準備しててくれ」

凍華「了解♪ 春海ちゃんが来れるってことはアマルガムが使えたんだね。あと、細かい砲撃は自動迎撃でなんとかなるから戦艦とかのだけ任せるよ」

紅刃「了解。任された！」

そうして、紅刃は先程日向を吹き飛ばした方へと向かって行った。

(さて、じゃあ私は瑞鳳ちゃんを護りながら春海ちゃんを待とうかな。

だし瑞鳳ちゃん・千歌ちゃんとお話でもしてよ(っ)

そんな感じで凍華は瑞鳳の下へと歩いて行ったのだった。

.....  
来るまで暇

## 帰還

「ただいま帰ったぞ!!」

「ただいま」

「ただいま戻りました!」

「えっと、お邪魔します?」

拠点もとい孤島に帰ってきた／攫われてきた四名は各々の声を上げる。

紅刃は大きく元氣いっばいな声を島に響かせ、続く凍華は優しく気が抜けるようなゆるいながらもはつきりとした声で、春海は大きくないながらもびしつと真面目そうな声を、千歌は多少警戒しているが、ここまでの帰路で三人の性格というかキャラを大方理解したのか、半分諦めが入った感じの声で言った。

紅刃「さて、家がすぐそこな訳だがまず帰ったらどうする? 姉ちゃん」

凍華「うゝん。千歌ちゃんに島内を案内するのは確定として、まず私も紅刃も血だらけだしまずはみんなでお風呂かな」

紅刃「んー、そうだな。ベトベトしないまでもやっぱりなんか血まみれのままは嫌だし、四人で入はい渠いるか!」

凍華「そうだね。私達はお風呂行くけど春海ちゃんと千歌ちゃんは どうする？」

春海「私はどっちでも大丈夫です。でも疲れはあるのでやっぱりお風呂行きます！」

瑞ほ「千歌さんも一緒に行きましょう」

千歌「嫌だ。って言ったら返り血に無理矢理連れてかれるだろうから行くよ。私も色々と疲れたしね」

凍華が振り返って質問すると、それぞれの考え方による答えが帰ってくる。

そして振り返って見たことで、凍華は千歌が春海に対して笑顔を見せていたことから、春海とは仲良くなっているように見えた。

凍華「姿が変わっても元々同じ部隊だし昔話とかして仲良くなれたのかな？」

歌ちゃんのことは春海ちゃんに任せれば大丈夫そうだね」

そんな感じで不安がひとつ減った凍華の耳に紅刃の慌てたような声が飛び込んでくる

紅刃「姉ちゃんあれ！砂浜に倒れてんのシロじゃねえか!? とりあえず回収してくる!!」

凍華「ちよつ、紅刃一旦待つて！ って聞いてないや。私は先に家に戻って入渠の準備するから春海ちゃん達は紅刃を手伝ってあげて!!」

指示をすると、二人は「了解」とだけ言って紅刃を追いかけて行き、凍華も急いで鎮

守府に戻つて入渠ドックの準備に取り掛かった。

l s i d e . 春海

私達は、シロさんをドックに運び込んで寝かせたあと、容態の急変に備えてゆっくりとお風呂に浸かつていた。

紅刃「ふいふ。ただでさえ疲れてるのにシロが漂着してたせいで二重に疲れたな。ひとまず無事だから良かったが」

凍華「そうだね、マシロちゃんには何事もないようで良かった。でもミクロちゃんとサギリんには通信が繋がらないんだよね。ふたりとも寝てるだけとかならいいけど」

紅刃「それにシロが着けてた今までと違う艦装。あれも後でじっくり調べねえとな

危険物だったら困る」

そんな感じで話して二人から目を離し、千歌さんの方に視線を移す。

千歌さんは完全に諦めがついたのか、完全に脱力しきっていたが、私の視線に気付いたからか、ちよいちよいとこちらに手招きした。

春海「なんですか？」

千歌「あの時私が第一艦隊と一緒にいて、あなたの足を射つた時。あの時のことを謝ろうと思つて」

春海「大丈夫ですよ。実際、アレがあつたからこの部隊  
千歌さんともこんな感じでまた会えましたから」

千歌「いいの？」

キョトンとする千歌さんに力強く「はい！」と答える。

千歌「そうでもそれじゃあ私が嫌だから、なんとかして陸地に戻つたらパフェでも奢らせて。そういえばさつき黒陰部隊って言った？」

春海「はい。黒陰部隊ですよ？」

千歌「つてことは」

少し考える素振りを見せる千歌さんに、紅刃が静かに近づいて頭に軽く手刀をいれた。



紅刃「悩むより先に話してみ？　つーかアタシらはそろそろ上がるけどどうする？  
出てから話は聞くけど、もう少し入ってる？」

紅刃の質問に間髪入れずに「出る」と答えたことで、じゃあ私達もあがるうか。と四人ともお風呂からあがった。シロさんは大丈夫なんだろううか？

l s i d e . 紅刃ー

紅刃「さて、聞きたいことはなんだ？　答えられることは答えるぞ」

瑞鳳からの質問に答えるため、食堂にて麦茶片手に向き合っていた。

瑞鳳「いくつかあるけど、まずこの部隊が黒陰部隊なのね？」

紅刃「そうだ。だがまあ、『黒陰』の名は向こうじゃ数人。それも元帥の周りと特務憲兵隊しか知らねえはずだが？

.....  
まあお前が知ってる理由は大方予想付いてるから答

えだけくれ」

瑞鳳「予想は付いてるのね。黒陰を知ってる理由は兄義兄から聞いたのよ」

予想通りの答えに、少しつまらないとすら感じたが、そこからさらに補足の答え合わせもしていく。

紅刃「その義兄は元帥だろ？ で、その妻の美羽姉えの妹だから知ってた。で合ってるな？」

頷く瑞鳳に、持っていた携帯を投げ渡す。

紅刃「使えるよな？ 操作がわからなければ姉ちゃんに聞いてくれ。アタシはあの艤装を調べてくる」

瑞鳳からの質問及び回答は予想通りのものしかなく、半ば飽きたアタシは艤装の調査に向かうことにした。

その後、艤装をあらかた調べ終わって食堂に戻ると、なんか一人増えていた。